

福岡市科学館 第17回 サイエンスコミュニケーション開発会議		作成日:2022年6月13日(月)
月日: 2022年6月13日(月)	時間: 14:00~17:00	場所: 福岡市科学館 6階サイエンスホール
出席者:		
久留米工業大学 副学長	■ 麻生(リモート)	
福岡市小学校理科研究会	■ 荒木	
西日本新聞社 取締役 メディア戦略局長	□ 大久保	
YESAND 代表	■ 高宮	
日本サイエンスコミュニケーション協会 理事	■ 高安	
九州大学大学院 芸術工学研究院 教授	□ 平井	
日本ボーイスカウト福岡県連盟 理事長	■ 井手	
株式会社HUMIコンサルティング 代表取締役	■ 中村	
株式会社トータルメディア開発研究所 取締役		
福岡市科学館 館長	■ 矢原	
福岡市こども未来局こども部	□ 氷室	□ 香月
TM	■ 吉武	■ 上田
科学館スタッフ	■ 田中	■ 井上
	■ 板垣	■ 藤本
		■ 興梠
		■ 高山
		■ 藤瀬
		■ 米村
		■ 穴澤
		■ 日下部(司会、記)

(敬称略)

配付資料:

- ・次第
- ・資料1 委員名簿
- ・資料2 前回議事録
- ・資料3 2021年度福岡市科学館運営状況報告
- ・資料4 2022年度サイエンスコミュニケーション開発会議の運営方針(案)
- ・資料5 2022年度分科会の運営方針(案)
- ・資料6 体制図

■ 議事内容(概要)	発言
<p>● 第1部</p> <p>1. 委員のご紹介(資料1)</p> <p>・新任 中村委員</p> <p>2. 議長・副議長の選任</p> <p>・議長 高安委員、副議長 矢原委員</p> <p>3. 2021年度のふりかえり(資料2)</p> <p>・前回議事内容については、異議なし。</p> <p>4. 2021年度福岡市科学館運営状況報告(資料3)</p> <p>管理運営責任者 吉武から説明。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2021年度末の利用者数は、前年比では130%以上となったものの、合計3カ月にわたる臨時休館の影響を受け、計画比ではかなり落ち込んだ。 ・新型コロナウイルス感染症拡大防止のため縮小営業中。開館時間9:30~18:00(通常21:30閉館)、基本展示室入場制限350名程度、交流室80席(通常200席) マスク着用等、国や市の指針に従いながら安全最優先で運営をしている。 ・インシタイン展をはじめ、特別展や企画展を開催した。 ・ドームシアターは、放映回数を変更して実施。講演会や天文台との中継の他、アーティストを招いてのライブイベント等も行った。 ・科学実験やものづくりプログラムは、定員数を5組に制限して実施。セミナー講座はオンライン開催も含めて実施している。クラブ活動は、8クラブが月2回のペースで活動している。1月~2月新型コロナウイルス感染症拡大により、ほとんどの事業を中止した。 <ul style="list-style-type: none"> ・最近上向き傾向があるものはあるか。今後の見通しはどうか。 ・昨年10~12月にコロナが落ち着きコロナ以前の入館者数にかなり近づいたが、第6波の影響で1~3月に落ち込んだ。昨年10~12月程ではないが、4月に入りコロナ前の6割程度と回復しつつある。 ・福岡市や全国のデータを見て、新たな変異株が出ない限りは新規陽性者数は減るとみている。今後の科学館の活動については、対面で行うプログラムもできると想定し計画している。 ・全国の科学系博物館では、2021年度入館者数6~9割減少と言われている中、福岡市科学館の回復率はかなり健闘している。 <p>5. 2022年度サイエンスコミュニケーション開発会議の運営方針(案)(資料4)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年は、アフターコロナを見据え、大きく変わる社会環境に対する科学館の新たな方向性を検討し、科学館の基本事業の改善・情報発信・展示リニューアルの方針・人材育成等について提言を行った。今年の10月に5周年を迎えるにあたり、科学館の基本理念とコンセプトを再確認しながら、サイエンスコミュニケーション、サイエンスナビ機能、プロモーション各担当業務における課題解決を目指したいと思っている。 <p>6. 2022年度分科会の運営方針(案)(資料5)</p> <p><第一分科会> サイエンスコミュニケーション</p> <p><第二分科会> サイエンスナビ機能</p> <p><第三分科会> プロモーション活動</p> <p><第一分科会> 一福岡市科学館における多様な学習プログラムの展開一</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度、第一分科会で実施した「ゲストティーチャー型」と「活動支援型」の事前授業と、第四分科会で開発した「デザイン思考を用いた課題解決型プログラム」をさらに精査し、「対話・交流・課題解決型プログラム」として館外での実施も含め計画したい。 ・また、プログラムの再開発・実施・発信データの蓄積も行いたい。 ・5年後の成果として、多様な展開方法に基づいた「学習プログラム」の作成を目標としている。 <p><第二分科会> 一自発的学びが生まれる科学情報の提供一</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学情報の発信について具体化を行う。サイエンスナビの問い合わせシステム等を使い、来館者の好奇心・疑問・考える力・創造性等の育つ機会をどのように提供できるか、またコロナ禍で来館できない人にとどのような発信ができるかを検討したい。 ・基本展示室のリニューアルに合わせて、サイエンスナビシステムのコンテンツをブラッシュアップする。 ・利用者自らで科学を楽しめるようナビゲートできる、ハブ機能としてのサイエンスナビを目指す。 	<p>吉武</p> <p>麻生 吉武 矢原 高安</p> <p>高山</p> <p>田中</p> <p>藤瀬</p>

<第三分科会> 一福岡市科学館の新たな機能とブランディングの確立一

- ・今年度新たに設置されたプロモーションチームが担当する。
- ・今年度は、まず科学館を取り巻く環境とコロナ禍におけるニーズの変容を調査したい。
- ・また、今あるコンセプトの理解を深め、時代に即した主要事業の具現化を図る方策の提案も考えている。
- ・今行っている事業の中で当館らしいものを明確化し、当館らしさを備えた新規事業を開発したり、プロモーションの方法やブランディングを確立していきたい。

板垣

7. 分科会委員の検討(資料6)

- <第一分科会> 荒木委員、平井委員、井手委員
- <第二分科会> 大久保委員、中村委員、矢原委員
- <第三分科会> 高安委員、麻生委員、高宮委員、佐藤委員

- ・これまで当会議で次のリニューアルを含め、展示物について検討を行ってきたが、今後はどの分科会で検討を行っていくか、来館者へのフレキシブルな科学情報提供という点で、今後も継続した検討が必要だと思ふ。
- ・展示の活用については第一・二分科会、展示そのものの大きな位置づけの検討は第三分科会で広く浅く取り扱うことにはなるのではないかと。

麻生

高安

- ・これまでサイエンスナビの活動に携わってきたが、コロナ禍でも工夫し何等かの形で実現できるようにスタッフが努力しており、継続的に活動できていることは素晴らしいと思う。
- ・新しい企画を生み出さなければならぬ状況もあり仕方がない部分もあるが、科学館が積み上げてきた実績として、これまで作り上げたコンテンツをアーカイブし、来館者をはじめ、スタッフが変わっても閲覧・振り返ることができるしくみを作ることができればと思う。
- ・開館5年目を迎えるあたり、展示のコンセプトを含めコンテンツ化していくことが重要。
- ・コロナ以前から、全国的に科学館の社会的役割については議論があったが、コロナによってその役割の変化が顕在化してきた。時代の変化に伴った取り組みが必要になる中、福岡市科学館は他館より先を行く事業を実施できていたように思う。

中村

高安

<休憩> 15分

●第2部

8. 協議:各分科会について 80分

9. 報告:協議の内容について

今回の協議内容を報告。

<第一分科会> 一福岡市科学館における多様な学習プログラムの展開一

- ・「課題解決型」プログラムの方向性について協議した。
- ・5年後に向けて、多様な学習プログラムの作成を図るため、定員を増やし参加者の裾野を広げてはどうかという意見が出た。
- ・館外で行う出前授業は、同一学年で受講することを活かし、学校のカリキュラムに沿った内容だと学校側も受け入れがしやすく、また、複数学年を対象とするのであれば、クラブ活動での実施が望ましいというアドバイスがあった。
- ・ボーイスカウトの活動では、既に課題解決型プログラムを実施しているとのこと。
- ・プログラム作成では、「課題解決」という結果に注目しすぎず、その過程や気づきも大切に内容の検討が必要。

田中

<第二分科会> 一自発的学びが生まれる科学情報の提供一

- ・それぞれが考える「科学情報の提供」について共有を行い、情報発信に必要なものは何か、今後のナビシステムや問いシステムの在り方について協議した。
- ・利用者が自ら問いを発見し組み立てていく自発的な学びを促すことが大切。その自発的な学びを促すために、科学館の様々なアクティビティをアーカイブし、ナビシステムやHP等を使ってコンテンツ化したものを発信していきたい。

藤瀬

<第三分科会> 一福岡市科学館の新たな機能とブランディングの確立一

- ・分科会事務局から、科学館の現状把握を行うために、これまで行ってきた事業の評価を行うべきではないかと意見があった。
- ・マーケティング調査や利用者アンケートを行いたいということだったが、まずは科学館のビジョンを掲げるべきという委員からの指摘もあり、分科会事務局にて、6月中に館内スタッフ向けにアンケート調査を行うことになった。
- ・ブランディングの確立という点では、具体的なアイデアが挙がった。
- ・(例)福岡市ミニ福岡(子ども参画)の拡大、講座参加のためのサブスクリプション(予約システム)の作成、有料クラブ組織
- ・開館当初のコンセプトの一つ「東南アジアの科学館」はどこへいった?
- ・人類史の発展を絡めた科学技術の在り方の検討が大切になっている今、科学館のテーマの見直しも必要ではないかと意見があった。
- ・7/29に次回分科会を実施予定。

高安

- ・第一分科会の課題解決型プログラムの作成について、基本展示室の利用者に、展示室の5つのテーマ(宇宙・環境・生活・生命・フューチャー)について課題と解決方法を考え発表・表現をもらうワークショップやサイエンスショーを開催するのはどうかとアイデアを出したが、インプットだけを望んでいる利用者もあり、利用者の様々な要望に応えられるプログラムには即していないと指摘を受け、改めてプログラム検討の難しさを感じた。
- ・12月のプログラム実施に向けて、委員にアドバイスをいただきながら検討にも積極的に参加したいと思う。

上田

- ・上田さんのアイデアを日々のサイエンスショーで行うのは難しいと思うが、試験的な実施であれば検討してもよいかもかもしれない。

高安

- ・たしかに試験的な実施であれば、サイエンスショーでできるかもしれない。
- ・多くの利用者(ライトユーザーとヘビーユーザー)に満足してもらうためには、多様なプログラムを用意しておく必要がある。
- ・これはプログラムの数を増やすという意味ではなく、様々な要望を持つ利用者に対応できる実施方法・進め方を検討するという意味であり、その実施方法の一つとして、今年度は「対話・交流・課題解決型」のプログラムの作成を行いたい。

田中

- ・第三分科会のブランディングの協議とも共通する部分がある。ブランドやあるものに特化したプログラムだけを実施するということではなく、これまで対話型や探求型等のプログラムを開発し効果を見てきたように、今回は「課題解決型」を開発するということでよいか。
- ・その通り。今後5年間で「課題解決型」を含む、多様なプログラムに挑戦していきたいと考えている。

高安

田中

・大学や全国の科学館との連携について議論があった分科会があったか。
・第二分科会では、包括連携をしている九州大学をはじめ、積極的に科学館の活動に参加してくれる学生が多くいることから、今後も人的な繋がりを大切にしていきたいという話をした。科学に興味がある利用者に、大学の図書館や先生を紹介(ナビゲート)できるような機能を持つサイエンスナビになることが理想。また、他館との連携もより強化し、コンテンツ化された情報の共有にも取り組むことができればと思う。

高安
中村

・アンケート調査について、問い方や集計方法は、九州大学の専門の教授にアドバイスをもらってはどうか。
ダーウインコースでは、色々な取り組みの中で育っていく子どもたちをどのようにアセスメント(評価)していくべきか議論をしている。プログラム開始時に子どもの性格に関するアンケートを実施すれば、活動中にどのような変化があるかみれるかもしれない。今後は、科学館を通して入館者・利用者が何をj得ることができているか等、うまくアセスメントできるしくみを作っていければと思っている。

矢原

・科学館や博物館では個人の知識や技術の向上で評価しがち。学校教育では人間的な成長を大切にしていると思うが、科学館(学校の外)ではその部分のフォローが厳しい。学校教育の中でのアセスメントについてはどう考えるか。

高安

・子どもの人間的な成長は長期的にみるべきだと思う。

荒木

・科学館において感じることを数値化したり、表現したり、何等かの形で評価・記録するしくみは、今後確立しなければならないだろう。

高安

次回は、2023年1月末に開催予定。